

1. それで、イエスがおいでになってみると、ラザロは墓の中に入れられて四日もたっていた。ベタニヤはエルサレムに近く、三キロメートルほど離れた所にあった。(11:17-19)
 - a. あなたは神様に対してもう少し早く動いてくれないかな、と思ったことはないだろうか。この話の中でもイエス様は明らかに4日遅れて到着している。マルタとマリヤの不安はどれほどであったらうか。もちろんイエス様はラザロを救ってくださると信じていたであろうが、いつ、どのようにしてくださるのかと気をもんでいたに違いない。
 - b. 人生の中で、神様の方法は私たちのものとは違い、私たちではなく神様だけが神なのだと思われる時がある。それでも神様に祈り願いを聞いていただくことは大切である。神様は私たちのしもべではなく、無限の自動販売機でもないが、すべてを完璧に働かせてくださる。
 - c. 神様に信頼する必要がある時というのは私たちが自分で何とかしようとする思いを取り去る時でもある。

2. マルタは、イエスが来られたと聞いて迎えに行った。マリヤは家ですわっていた。マルタはイエスに向かって言った。「主よ。もしここにいてくださったなら、私の兄弟は死ななかつたでしょうに。今でも私は知っております。あなたが神にお求めになることは何でも、神はあなたにお与えになります。」(11:20-22)
 - a. マルタは年上であったのでイエスを出迎える。イエスに会って嬉しかったはずだが、最初に口をついたのは歓迎の言葉ではなく不満に満ちた言葉だった。
 - b. マリヤは最初は家ですわっていたが、イエスが呼ばれると立ち土がって会いに行き、マルタと同じ言葉を口にする(32節)。しかしマリヤの言葉のほうがマルタの言葉よりもイエスの心を動かしたようである(33節)。
 - c. 聖書にはイエスはマリヤとマルタの両方とも愛しておられたと書かれてあるが、マリヤのほうがマルタよりもイエスの心を動かす何かを持っていた。神様は私たち一人一人を愛しておられる。しかし神様がマリヤを特別に心に留められたように、神様との関係を重んじ育てていく人は神様の心に特別な場所を得ることができる。

3. イエスは彼女に言われた。「あなたの兄弟はよみがえります。」マルタはイエスに言った。「私は、終わりの日のよみがえりの時に、彼がよみがえることを知っております。」イエスは言われた。「わたしは、よみがえりです。いのちです。わたしを信じる者は、死んでも生きるのです。(11:23-25)
 - a. マルタはイエスがどなたであるか、また終わりの日のよみがえりの時についてすばらしい知識を持っている。正しい教義を持っているが、彼女が望みをおくその教義が肉体の形をとったのが目の前にいらっしやるお方であるということには気付かなかったのである。
 - b. イエスは正しい教義そのものであるだけでなく、人格をもっておられ、よみがえりである。ここではラザロをよみがえらせることによってそれを示された。
 - c. 終わりの日のよみがえりの時というのは私たちすべてが待ち望むべきことである。それは私たちが望みをおくことのできる、この世の不確かさによって揺るがされたりすることのない、これから確実に来る約束である。

4. また、生きていてわたしを信じる者は、決して死ぬことはありません。このことを信じますか。」彼女はイエスに言った。「はい、主よ。私は、あなたが世に来られる神の子キリストである、と信じております。」(11:26-27)
 - a. イエスのこの宣言は体が朽ちない可能性を言っているのではなく、私たちの存在が死を見ることがない、ということである。
 - b. いつの日かよみがえりは起こるが、イエスはよみがえりが起こる以前に、死ではなく永遠のいのちが与えられるとおっしゃっている。
 - c. この永遠のいのちとは私たちが受け取るのを待つものではなく、すでに今から始まっていて、肉体が機能しなくなった後も続くものである。